



令和7年度 東京都北区立王子桜中学校

令和8年1月 第10号

校長 阿久津 光生

〒114-0002

東京都北区王子2-7-1

Tel 03-5902-3155

王子桜だより

共生の精神に満ち、国際的視野に立ち、大きな夢の実現のために限りなく向上に努める人を育てる。

教育目標 自主 創造 飛翔

《あけましておめでとうございます》

あけましておめでとうございます。地域・保護者の皆様におかれましては、昨年中は多大なるご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

本年も教職員一同、力を合わせて、子どもたちのため、保護者・地域のみなさまのために全力で頑張っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



《ゴミゼロ運動94名の生徒の皆さんの参加、本当にありがとうございました！》

12月9日（火）の放課後、園芸ボランティア部のみなさんや、各学年、学級から募った有志のみなさんと、ゴミゼロ運動が行われました。まず、プランターに綺麗なお花（パンジー・ビオラ）を植えて、次に、ゴミゼロを目指して箒やちり取り等を使用して一生懸命掃除をしてくれました。王子街道がとても綺麗になり、訪れる人を綺麗なお花と行き届いた環境でお迎えしようというおもてなしの心に、王桜の素晴らしさを改めて感じました。

冬の寒空の下でボランティア活動をしていただいた、たくさんの生徒のみなさん（1年生34名、2年生45名、3年生15名、合計94名）、ボランティアスタッフのみなさん、担当していただいた先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



《生徒会長さん・図書委員長さんがNPO 法人高峰譲吉博士研究会を訪問

全校生徒分の本をいただけてきました！》

12月9日（火）放課後に、生徒会長の田中さん、図書委員長の菊地さんが、港区虎ノ門にあるNPO 法人高峰譲吉博士研究会を訪問しました。そして事務局長の長谷部様より、科学伝記マンガ『高峰譲吉博士物語』を全校生徒のために500冊も頂戴いたしました。その他にも、大変高価な『生物・生命科学大図鑑』までいただきました。本校のメディアセンターにおいて科学・未知への探求に活用させていただきます。科学伝記マンガは、生徒会・図書委員会がアントレプレナーシップ教育の一環として活用していくために、時期・方法を考えて生徒会朝礼で報告して下さるとのことです。

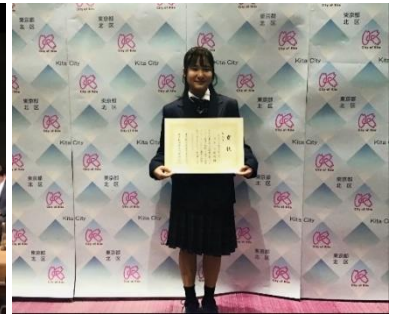
本校のアントレプレナーシップ教育も、教育目標「自主・創造・飛翔」に基づいて、生徒の自主の精神により企画・運営されています。また、先人の教を深く学び研究することで、現代の新しい事柄や問題の本質を理解し、新たな発見や創造につなげようとする「温故知新」の考えを持って積極的に取り組んでいます。こんな王桜生の素晴らしい姿に改めて感心しました。

最後にNPO 法人高峰譲吉博士研究会事務局長の長谷部様には、何から何までお世話になり、王子桜中学校のアントレプレナーシップ教育に多大なるご尽力をいただいていることに心より感謝申し上げます。



《祝 比べて読もう新聞コンクール 奨励賞 2年生 田本さん おめでとうございます！》

第13回 比べて読もう新聞コンクールで小学校・中学校の児童・生徒の応募作品5,754点の中から、2年生 田本さんの作品「記事で知る将棋の面白さ」が奨励賞に選ばれました。12月15日（月）北とびあにて授賞式が行われました。本当におめでとうございます。



《祝 バスケットボール優秀選手賞 1年生 毛さん・渡會さん おめでとうございます！》

バスケットボール部1年生の毛さん・渡會さんが12月14日（日）に飛鳥中体育館で行われた第15回北区バスケットボールジュニアカップにおいて優秀選手賞を授与されました。本当におめでとうございます。これからも頑張ってください。



《園芸ボランティア部 収穫したサトイモを子ども食堂に寄付しました！》

12月18日（木）園芸ボランティア部1年生の柚之原さん・垣内さんが、王桜の屋上菜園で収穫したサトイモを、北とびあの北区NPOボランティアぶらざにお渡ししてきました。こちらのボランティアぶらざ様から子ども食堂へお届けしていただくことになります。園芸ボランティア部の皆さんが手塩にかけて作ってくれたサトイモを、子ども食堂で美味しく食べていただけたら幸いです。また、古切手もお渡ししてきました。柚之原さん、垣内さん放課後遅くにありがとうございました。



《薬物乱用防止教室を行いました！》

12月19日（金）6校時、体育館で1、3年生を対象に薬物乱用防止教室を行いました。一般社団法人 北区薬剤師会 岡村様に講師としてお越しいただき、「薬物乱用の危険性について」と題してご講演をいただきました。生徒の皆さんも薬物乱用がどれだけ危険で恐ろしいかということを改めて学ぶことができました。岡村様、本当にありがとうございました。



《2年生防災学校を行いました！》

12月20日（土）土曜授業で2年生は防災学校を行いました。体育館では市民防災研究所の齋藤様からの防災講話や心肺蘇生法体験、王子街道では地震体験、中学校側校庭では初期消火体験を行いました。王子消防署、北区危機管理室地域防災推進課、帝京大学医療技術学部の学生さん等多くの方々のご指導・ご支援のおかげで、貴重な体験ができました。本当にありがとうございました。また、雨天で寒さが一段と厳しい中、たくさんの保護者の皆さまにご参観いただきまして誠にありがとうございました。



北里柴三郎に学ぶ その2

～破傷風の血清療法の確立とノーベル賞候補～

破傷風菌の純粋培養に成功した北里は、多くのコッホの門下生の中でも高弟に数えられるほどになりました。病原微生物学者・北里柴三郎の名は、世界に知れ渡っていたのです。その北里が次に取り組む研究は何か。「きっと新たな病原菌の発見を目指すだろう」と多くの研究者は想像していました。しかし北里が次の研究課題に定めたのは、破傷風の治療でした。破傷風の原因である病原体を特定した上で、破傷風の特性を改めて検証し、その治療法の確立を目指したのです。

北里はまず、破傷風菌の培養液を薄めて毒素の濃度を低くしたものをウサギに注射してみました。結果、ある程度薄めた毒素でウサギが死ぬことはありませんでした。それから濃度を徐々に高めながら注射を繰り返したところ、やがてウサギは致死量の20倍の毒素にも耐えるようになりました。これは、ウサギが破傷風の毒素に対抗する免疫を獲得したことを示唆していました。「破傷風菌の毒素に対抗する免疫がウサギに備わったのなら、その働きを破傷風の治療に利用できるのではないか」。そう考えた北里は、ウサギの体のどこに免疫の働きが生じるのかを徹底的に調べました。肺、脾臓、肝臓、リンパ節など一つ一つ丹念に調査した結果、ついに、破傷風菌の毒素に対抗できる免疫が血液にあることを突き止めたのです。ある日北里は、免疫を獲得したウサギの頸動脈から採取した血液をネズミの腹腔に注入してみました。すると、24時間後に破傷風菌そのものを注射しても、ネズミには何の異常も認められず、健康体そのものでした。さらに、免疫を獲得したウサギの血液を放置して凝固させた上澄み液(血清)をネズミに注射して同様の実験をしたところ、より強力な免疫効果が得られました。北里は、動物の体内に備わった毒素に対抗する免疫体を抗毒素と名づけ、抗毒素が感染症の治療や予防に有効であることを世界で初めて明らかにしました。すなわちそれは、少量の毒素を繰り返し注射することによって免疫を獲得した動物の血清に治療及び予防の効果があるという、いわゆる「血清療法」の発見でした。今でこそ聞きなじみのあるこの言葉ですが、当時はこうした治療法は存在しなかったため、不可能を可能にする極めて画期的な発見でした。北里は、破傷風菌に苦しむ多くの人々の生命を救うことを目指して、周囲の批判や疑問の声にも臆することなく、懸命に研究に取り組みました。そうした北里の揺るがぬ姿勢が、世界の感染症撲滅の歴史に新たな一頁を加えることになったのです。



ドイツ国立伝染病研究所
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念博物館



エミール・フォン・
ベーリング
【提供】学校法人北里
研究所北里柴三郎記
念博物館

北里が破傷風の免疫に関する研究に邁進していたころ、同僚のエミール・ベーリングは、ジフテリアの免疫に関する研究に取り組んでいました。同じ免疫に関する研究報告を2人から聞いていたコッホは、北里が免疫血清療法に向けた画期的な研究成果を出しているのに対してベーリングが行き詰まっていることを案じ、ベーリングに北里から研究方法の助言を受けるようアドバイスしました。北里の助言を得たベーリングが「大変参考になった」とコッホに告げたところ、コッホは北里とベーリングを呼び出します。それぞれが進めている免疫に関する研究を、今後は共同で行うよう指示したのです。その後北里は、ベーリングと共同で「動物におけるジフテリア免疫および破傷風免疫の成立について」と題する論文を著し、1890年12月「ドイツ医事週報」に発表します。この論文は大反響を呼び、多くの医学関係者を驚かせることになりました。1901年、第1回ノーベル生理学・医学賞の選考会が行われると、北里とベーリングの血清療法は高く評価されて、2人はともにノーベル賞の最終候補に挙がりました。結果的には、ノーベル生理学・医学賞に選ばれたのはベーリングただ一人でした。第一回の選考では、現在のように複数の受賞者は想定されていなかったのです。しかしこれまで書いてきたとおり、そもそも血清療法そのものを確立したのは北里でした。北里が同時受賞、いや、単独受賞をしておかしくはなかったはずですが、これについては、当時のノーベル賞の主催者が西洋人以外に受賞させる考えを持っていなかったとも言われています。日本国内の研究者達が推薦をしなかったことも、北里がノーベル賞を受賞できなかった理由の一つのようです。

ノーベル賞の受賞こそ逃したものの、世界的な実績と名声を得た北里でしたが、帰国した日本で思わぬ苦境に立たされることになります。

～ペスト菌の発見～

横浜港に到着した船から降りる北里を待ち受けていたのは、2,000 人を超える人々の歓声でした。しかしそこには、北里をドイツに派遣した内務省をはじめとする政府の関係者、東京大学医学部の関係者の顔触れはほとんど見受けられませんでした。休む間もなく内務省や東京大学医学部に顔を出した北里は、ようやく自分が置かれた立場を理解することになります。

北里は、緒方正規の「脚気菌」説を完全に否定したことで、緒方本人はもとより、陸軍医をはじめ多くの医者達に煙たがられる存在になっていたのです。軍や役所、大学に席を置く医者にとって、身内の有力者が主張する「真実」の方が正しい答えだったのでしょう。すっかり居場所を失ってしまった北里のことを心配した長与専斎（※北里が所属する内務省衛生局の初代局長。この頃は「大日本私立衛生会」＝現在の日本公衆衛生協会の副会頭）は、北里の苦境を伝えるべく、ある人物のもとを訪れました。それは、教育者として既に著名だった福沢諭吉でした。長与は福沢に、北里が内務省や東京大学から冷遇され、研究を続ける場所がないことを相談します。すると福沢は、私財を投じて、北里のために東京の芝区芝公園 5-3（現在の東京都港区芝公園1）に「私立伝染病研究所」を設立し、その初代所長に北里を任命しました。また、翌年には、日本で初めての結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」を開院しました。しかしこれらはドイツのコッホ研究所、フランスのパスツール研究所と比べればあまりに小さく、手狭な研究所でした。そこで、明治 27（1894）年 2 月、内務省の土地を借りて、東京の芝区愛宕町（現在の東京都港区西新橋 3）に新しい研究所を開設します。研究環境が充実することを考えれば、伝染病研究所が広がったことは北里にとって大変嬉しいことでした。しかし一方で、内務省の土地を借用するのは、役所に借りができたような気がして、手放しでは喜べませんでした。愛宕町に研究所が移転して 3 か月が過ぎた 5 月のこと、香港から内務省衛生局に連絡が入りました。中国の雲南省の山岳地帯で発生したペ



福沢諭吉肖像画
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念博物館



伝染病研究所発祥の地

港区芝公園 1-1 御成門駅 A3b 出口そば

ストが、東へ東へと伝染し、中国南部の広東省を経由して、ついに香港に到達したということでした。ペストは感染すると皮膚が黒くなることから「黒死病」と呼ばれ、この病気による死亡率は非常に高いものでした。14世紀には、わずか数年でヨーロッパの全人口の 3 分の 1 を死亡させたと言われています。日本への侵入を食い止めるために、まずペストの原因を突き止めなければならないと考えた政府は、伝染病研究所の北里と、東京大学医学部教授の青山胤通を香港に派遣することにしました。この青山は、東京大学医学部時代から北里と交流があった人物です。ある時、青山が外国人教師からの質問にうまく答えられないのを見て北里が笑ってしまったため、恨みを買っていた相手でした。世界的な名声を得た北里と、国内トップの実力者の青山。学生時代のことを忘れない青山が北里に送る視線は非常に厳しく、激しいライバル関係が続いていましたが、くしくもこの時、2 人は同じ目的に向かって手を組むことになりました。明治 27（1894）年 6 月 5 日、北里らに乗せた船は横浜港から出帆すると、6月12日に香港に到着します。香港では、ペストによって 5 月末から1週間あまりで 577 人が死亡、230 人が治療中という惨状でした。到着した 2 日後には、青山が死者を解剖し、北里が血液、脾臓、リンパ腺腫などを検査しました。その結果、北里は、ペストの原因はこれまで発見されていなかった「ペスト菌」にあると判断します。さらに解剖と検査を続けた北里は、6月18日にはペスト菌の存在を内外に正式に公表しました。

一方、同じ香港でペスト菌を発見した研究者がもう一人います。それは、パスツール研究所のフランス人研究者・イエールサンという人物です。もっともイエールサンの発見は北里より数日遅れていたため、ペスト菌を世界で初めて確認したのは北里その人でした。香港のペスト騒動から 5 年後の 1899（明治 32）年には、日本国内（神戸）でもペスト菌が検出されています。北里はこの時も調査に赴きましたが、見つかったのは香港でイエールサンが発見した「グラム陰性」という型でした。脚気を巡る論争をはじめ、北里を快く思っていなかった森鷗外らは、イエールサンを支持して、北里の発見は誤りだったのではないかと攻撃します。世界に認められた北里でしたが、母国の同業者に認められないという矛盾に苦しみ続けました。そうしていつの間にか、ペスト菌を発見したのはイエールサンという定説が広まってしまうのです。この後、ペスト菌に関する北里の真の功績が認められるのには、長い年月が費やされることになります。

～文部省移管事件～

北里の伝染病研究所は世界でも最新の免疫血清治療を実践したため、極めて高い完治率を誇りました。そのため、全国から多くの感染症患者が伝染病院研究所に押し寄せました。日本政府は、目覚ましい治療実績を挙げる伝染病研究所のより一層の発展に向けて、1899(明治32)年に伝染病研究所を私立から国立に移管させました。伝染病研究所は、北里を所長に置いたまま、内務省が所管する国立の研究機関に移行しました。そもそも福沢諭吉が北里に研究の場を提供するために創始し、1892(明治25)年に大日本私立衛生会の附属機関として発足した伝染病研究所でしたが、当初は伝染病の病原菌の探索や治療方法の研究が主な業務でした。その後、1894(明治27)年に芝区芝公園から芝区愛宕町に移転し、それを機に国から補助金が支給されるようになると、伝染病の探索や治療方法の研究の他に、免疫血清の製造や伝染病の予防・消毒・治療・材料の検査などの講習業務も担当するようになりました。

伝染病研究所が順調に発展していく一方で、内務省に移管されて2年後の1901(明治34)年、北里に悲しい知らせが届きます。私財を投じて北里を支援し続けた最大の恩人の福沢が脳溢血を再発し、66歳で他界したのです。翌年には、常に北里の後援者であった長与専斎が、心臓弁膜症によって福沢を追うように急逝します。享年64歳でした。恩人の福沢と後援者の長与を相次いで亡くして悲しみに暮れる北里でしたが、後年にはさらなる苦難が待っていました。

1902(明治39)年、手狭になってきた愛宕町の伝染病研究所を、芝区白金台町1(現在の港区白金台4)に移転拡張することになりました。白金台の1万9,000坪余りの広大な敷地には、車寄せのある二階建て煉瓦造りの本館、その奥に病室、採菌室などの2号館が並び建ちました。この新築移転から8年後に、事件が起こります。1914(大正3)年4月に第二次大隈内閣が誕生すると、そのわずか3ヶ月後に第一次世界大戦が勃発しました。大隈内閣は、この有事に乗じて、「文政統一、行政整理」という名目のもと、伝染病研究所の文部省への移管と、東京帝国大学への組み入れを計画しました。そして、伝染病研究所を創設以来22年もの長きにわたり牽引し続けてきた所長である北里に一言の相談もないまま、内務省所管から文部省に移管することを閣議決定してしまったのです。もともと伝染病研究所は、福沢の土地や森村市左衛門の寄付など、北里の能力と熱意に感銘を受けた民間人による献身的な支援によって日本で最初に誕生した私設の研究所でした。それが突然文部省の所管となり、東京帝国大学医科大学の附属機関に組み入れられてしまうのですから、北里の驚きとショックは計り知れませんでした。伝染病研究所の文部省移管は、医学会を二分する大事件となりました。この頃の北里は、全国の医師会の主導的役割を担い、多くの医師の支持を集めるとともに、政友会(総裁・原敬)と近い間柄にありました。そのため、「大隈首相が、最大野党である政友会の支持基盤の弱体化を謀る目的で、伝染病研究所から北里所長を追い落としたのではないか」「東京帝国大学医科大学青山学長の策謀に手を貸したのではないか」と国民から非難の声が上がるほどでした。このあまりにも横暴なやり方に北里は納得できず、研究所を辞職しました。北里、61歳の時の出来事でした。

北里が辞表を提出した翌日には、北里を慕い続けてきた所員一同も辞意を表明します。北里の退所によって、伝染病研究所はその歴史に幕を閉じるかのように思われました。しかし、思わぬところから救世主が現れます。それは、養生園の事務長をしている田端重晟という人でした。田端は、養生園の運営によって30万円(現在の約30億円に相当)ほどの資金があることを北里に報告します。

田端は亡き福沢が推薦した人物でした。世事に疎い学者集団を心配して、経理に強い田端を送り込んでいた福沢の心遣いが、伝染病研究所の窮地を救ったのです。田端が蓄えていた資金をもとに、北里は、土筆ヶ岡養生園に隣接する芝区白金三光町(現在の港区白金5-



港区白金台4丁目に移転拡張された
伝染病研究所(現東京大学医科学研究所)
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念博物館



(左) 東京大学医科学研究所入口 (右) 近代医科学記念館 (港区白金台4丁目)



白金三光町に創設された北里研究所
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念博物館

9-1)におよそ 2,500 坪の土地を得て、北里研究所を設立しました。北里の師のロベルト・コッホの誕生日にあたる 1915(大正 4)年12月11日、開所式が盛大に举行されました。開所の後、田端による奇跡的な財源確保や、北里の個人名義の資産の取り崩しが明らかになります。すると、多くの国民から、政府に理不尽な仕打ちを受けた北里への同情の声が上がり、多額の募金が寄せられたのです。

昭和 6(1931)年 6 月 13 日、北里柴三郎は突然の脳溢血で 78 年の生涯を閉じました。北里の訃報は当時まだ珍しかったラジオの臨時ニュースで全国に放送され、翌日の新聞各紙でも一斉に報じられました。さらに、訃報は国内だけでなく、全世界に向けて伝えられました。6月17日、葬儀会場となった青山斎場は多くの

花輪で埋め尽くされ、医学会や政界の名士が一堂に集まり、その数は 4,000 人を超えました。北里の墓は青山墓地にありますが、それとは別に、かつてコッホが亡くなった年に北里が建てた「コッホ祠」の傍に、北里研究所の師弟たちが「北里祠」を建立しました。その後、昭和20年の東京大空襲の際に北里祠は消失しましたが、幸いにもコッホの祠は残ったため、コッホと北里を合祀して「コッホ・北里神社」と改称しました。現在では北里研究所の守護神としてお祀りされています。決して終わることのない感染症との闘いに生涯をかけた東西 2 人の医聖を奉る社を訪れると、そこに宿る神々しく静謐な雰囲気を感じられます。

さて、北里の人生において常にその核心にあったもの、それは医学を学術的な研究対象として捉えるのではなく、病気の治療と予防を何よりも最優先に考える医師としての誠実な姿勢に他なりません。北里が「北里研究所」を設立してから半世紀、創立 50 周年事業として、昭和 37(1962)年に「学校法人北里学園」が設置され、「北里大学」を設立しました。開校した当初は衛生学部があるだけでした。それ以降、薬学部、畜産学部、衛生学部、教養部、医学部(医学科)が増設されます。北里は常々、「事を処してパイオニアたれ。人に交わって恩を思え。そして叡智をもって実学の人として、不撓不屈の精神を貫け」と門下生に説いていました。その信念は、「開拓」「報恩」「叡智と実践」「不撓不屈」を建学の精神として、今なお北里大学に深く息づいています。



コッホ・北里神社
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎博物館



港区白金「北里研究所／北里大学
(白金キャンパス)」全景
【提供】学校法人北里研究所広報部



港区白金 「北里柴三郎記念館博物館」

ちなみに、本校の近隣にある順天学園が、2026 年 4 月 1 日より学校法人北里研究所の附属校となります。順天学園は、江戸時代にあたる 1834(天保 5)年に和算の研究者であった福田理軒が大坂に設立した順天堂塾に始まり、現在の渡辺孝蔵理事長に至っています。

大阪の順天堂塾の近隣には緒方洪庵の適塾があり、北里が生涯お世話になった福沢諭吉が 22 歳の若さで塾頭をしていたという縁もあります。1913(大正 2)年には北里の提唱で日本結核予防会が創設。渋沢栄一翁が副会頭を務め、財団法人化後は会頭に就任。北里は理事長を務めています。北里大学附属順天中学校・高等学校の誕生は、渋沢栄一翁が愛した北区を舞台に百年前の歴史が邂逅し、北里の志が現在に受け継がれていくロマンを私達に感じさせてくれます。



(左) 順天学園全景 (右) 渡辺孝蔵理事長と北里柴三郎銅像